

菴菴句集あ編
下



三 14
文和 857
號 2

益心好白集卷之下

几蓮著

杜く部

新本ぬと念をき法噴るる
杜く部何の部く部所
負長く追つく部りく部の杜
杜く部く部何の部く部の杜
知杜く部の部く部の部く部
杜く部の部く部の部く部の部
杜く部の部く部の部く部の部
杜く部の部く部の部く部の部
杜く部の部く部の部く部の部



さかひに減あんとすはあまのこ

セタ

後ノ葉を朗詠集の志あり
志すはくはのふも白きあり
はと入やさるくこまふ指子あけ
あまのまもあまのふし親指あ
親指ををけしとれはあま
す口の夕かたあまの
あまのまもあまのふし

大なるやあまのまもたあまの

相所はのまもあまのまも
接待のまもあまのまも

英一曝の画の賛を以て

田中くま月夜を以てあまの
あまのまもあまのまも
あまのまもあまのまも
あまのまもあまのまも

あまのまもあまのまも
あまのまもあまのまも
あまのまもあまのまも

いふもつや望田白のつりかえ
稲妻あふちの音や竹の露

春夜つく句をよみし

日ころ仲ろくそ解あふまじり
心入の力者あやしく角力を
岩嶺や伝ふの角力ちりて
負片き角力をいづれのこころ
おし柳のしほ

柳散ほつ洞石 處こ

小孤の何しむせむし小萩ら
たふらつそ萩やたのしむけふら
山暮て世ハ暮れはるる花は
あふんたむし若ふらむあそび
里くハさともおもハしむ所は
亦西は所ハあふたさむら
一世をまじりぬきまらぬ
秋の片をよみしやふかのうた
あふんたむし若ふらむあそび

猪の露おろしけとをみゆは
白萩を春つらとさるちか
垣手潜る花いよと共物なる
すもろもつる花をうけ佛堂

間水ほめ書

おろかや一輪月をう倒のう
お目やも威のたしと書さる
沢の蘭香ううれとおもむ
蘭夕楓のくれと書楠とむ

辨花書

花をさるひと然なるけ茂花坊
あらと書やさら男の胸をぬる
よぬれ書さるうと書

あし義山

さきより一里眉をぬの書
白萩や萩の刺るひとる
物倉の中かよの書は白
市人のおらうと書

かろくこや指川のせうりたて中々
かに一むや七妻の程を国々
新衣のやうに衣をきりて女の衣

夏の柳葉一けりたてを

夏の衣をきりて衣をきりて

夏の衣をきりて衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて

の栞てもけりて衣をきりて
かゆせと衣の衣をきりて
ハ新衣のやうに衣をきりて
おゆりて衣をきりて
と衣をきりて

れ一節月より衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて
新衣のやうに衣をきりて

蠹して葉中へさたをこけ
 小百姓 勢をれ老とあつこ
 鬼灯や活あ乃女う生写し
 日ハ脚関底の澹うとんか
 良辰とあつこもあつこ
 訪りある人もあつれも

中へこむりあれいそ月をな
 名月こあつこつ控るる部け
 夕の園の孤ゆも通る月をな

月天心を角くさ所を因らり

忠則た蹟一材乃松と倚り

月々看れらるる松たのけ

若月やあつこ通るのこ

若月やあつこ通るのこ

押籠る月

松くよさつこさるるの月

月々看れらるる松たのけ

伸れの魂をあつこつあつ月の

若月や秋の人住み峰の草を
山の霧や海を離る月も夕
危の月主ととも草花の
らさこの世に闇とらふの月
鏝とら解るる山鬼我とて
玉山のすまいたおとんこ
其の付とあを眼伸よ在て
月をんれとたのせうく砕くまの玉
花さハ形さうあるルおれ月

雨のいづろふくしとあはて

若月や井泉花の魚遊る

探歌雅字

一行の序や焼めく月と山を
紅の飾もとりすおとりの存ひとら
る中の屏とよ歌をたて
雨乃露出うたわハハ田とら
床をさし一用し力る序よ結中
床端てささこれ本末あれまらう

草の島の雲の影に
さし霞の影の
とくを帰しては
みづの影の
ぬるる色

残照を詠

唐土の山影
明く入日
残照
ある山影
唐土の山影
明く入日
残照
ある山影
唐土の山影
明く入日
残照

唐土の山影
明く入日
残照

あましく明く
やけさの影

老懐

あましく明く
やけさの影
あましく明く
やけさの影

老懐

あましく明く
やけさの影
あましく明く
やけさの影

味一かに終りおれたる秋の習

故人への別る

本意を承りていささかおんむらじり
ふかきや釣の糸はあきれ風
秋の風書しやまを成るる
金屏の羅ハ誰カあやめを
秋風や千魚ける浪底

友人、移竹をとおしよ

去来去物々移りぬいづれ

此水の目鼻書ゆくやうな
腋の中へ薫ハぬけりし時

四十よれとておんあそ

ややとくれ

あふれりてあふれぬやうに
人の世を流るるたるやうに
我定りておんあそ

おそ者孫の聲

脚を御したのちれ自のこころ

姓名ハ何 子ノ号ハ母山子
 三輪の田ノ改めを居るが
 山流や流海子なる川夜の音
 や裡もはたしむる花は
 とて我ノ口行をよそ
 くらたえゆるやみられ
 新くせらるゝにちてり
 水流るゝ所をさうり
 故らや海にまくとそそれ

まじりて秋 更科の
 花のやまのこをれ
 花の日のくらそ
 深るるまは

題白川

黒谷の隣ハ志や
 花のよどき
 綿つやたさ
 三徑乃十
 甲斐なみ

川魚釣の舟舟槽なる急入前
 百日ろ鯉切をく 鮎のつち
 動上ー鮎の巨口玉や吐
 ひとりと大魚かゝるのせりー
 くらぬ田疇きん藤てふさろ
 下葉をたて志のこはれをたの
 日影をたのむてたけくはの
 ちこるをいふたあはれ葉ー
 水うれく夢れあめえ あまを
吾を

小鳥ある音はれまをねのた
 けあももかぐさくろ野おと
 山花や極の光あゝ宿のた
 竹俣は所お存(ま)るた
 くら野に眠る鴨あゝはは所
 野立て秋天いさくたのこを
 けりるあをせせせる林
 くら智やの機あのみや
 陸田降て志野の夕日や江鮭

お途ちとたゆりや 額白
社乃暮けたの地ちう油さまで
社の地やゆとりと奈良のたき市
追剥をせまう物さう社の地
秋の地や水底の草を踏了ら
丸山ちりまきとて画さるに
潜せととゆきとれと

かのう力乃肩より吼ておまの秋
甲賀の嵐の志のいの賭や地すは秋

松上社のおとちるる刀のち
力の秋やとちちとまのよおまあり
我則あるとて

會催しとて

小路りちちくおまのちちち
ちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちち

る羽多く五六孫とくせらけ
明方の老松も新會の松も
存ふる我若貴存まゆらけ
布くのよる同くそこのいそ
客傍より二階より来る所らけ

三井の山よりの三上山の
秋空に若たる鐘のくは
角ふの字のいそいそ
しら枯やしらせめえたる漆の村

舟中へ葉しらよめたる芭蕉は

斗文又より八十の松と
ふとくくくくく

福けてぬもひらけ老の松

廣は

水くして池のひつみやほる月
山茶をのふあらんをきりほの月
泊るをまていそよまおのやうな
十月のそやうはしら後れ月

十二夜の月とて雲は霞の如く

我日のも此風流こらり

唐人とけりし色てのち月

日てりし伏水の小葉もらひ

山嵐の菊をとりてあふり

あるの菊をとりてあふり

不白もとめり

さくの霞あてて現るいのち

いてはらも投壺あつせん

菊の在るをてあふり

白葉や呉山の雪をひ

手摺して色失へる

村百戸菊をとりてあふり

あははせし枕の夜をよ

菊のけしハ菊入り

高碓

西ちりるおをもてあふり

ひはち田くおをとりてあふり

谷水の書きておる事もみらざ
からてゐるなほさるりのみ池
むらぬ葉ふは南人たのしう
し
し

笛の音く時よのまゝのほら
ふとれ少所ら果やとと
おくのらぬまゝらふか
そんのかの舟に下せ上川
新米の畑田にはもうみ

茶種拾日あるが
山家

拾ふのらぬまゝらふか
望際よのらぬまゝらふか
欠く月もあつた
起る屋よりおの
おのらぬまゝらふか
もやちや通夜の連
ひるのたつた

子爵のちいよも帝や歌よ此秋
秋風や酒肆の詩よ海者
秋のものよとほふ能ふあつて

幻住庵の燈籠り

旅宿よと行きて

丸盆の雅よむらじの音やむ
雅捨ふ播らの児のよ後や

探歌

餉ころや後やとから

清く蔵や蓄めり番椒
おく心ころけし梅よ
梅よよれや念珠とけふ
にゆよとまめ垣根や番椒
稚子乃寺ふくむいて
几茎と竹吹くおふ
草朽や改と響れて峰の月
花巻ハ伏るれ 杉露ハあられぬ
いふよれ真こあふれたるむら

思ひしや秋酒の仲のまゝく處
重なる惠心の糸入は地縛
あきまゝにたをれて新ひも

あはれなまて

くはの秋五臓のくは宿うをま
いしうふと増いれぬ暮の秋
り秋やあきなきたる秋く
認めし師の方や暮の秋

宿をまもはる

こそ

あきまゝにたをるのやとあはれなまて

○
おのゝ東郷く下し書目しとらぬ
勝りてく准し書子とぬふのう
ぬりり佛しとぬしとらり
東山し書に住しとらりし
たのし音は神よやせと

為雪とてえん川な少備おと
いふ世しとえんしとらりゆと
たのしとぬしとぬしとらり
のしとらりけん補くや左ん

大兵ろくくぬあはむ書目
席の座をぬくしとらり

十段

あふたしと茶もたぶくともぬ
はるぬぬしとぬしとらり
いふとらりしとらり

簾とらり夜神しとらり
白鳥しとらりぬしとらり
秘把の気もぬしとらり

茶の花は白も紫もあつた
茶乃をふやなをうらうと路を
咲けどもあつたあるを石の花

はききいふふりれて是情

ふる下お女の別書うおひ

はゆやゆゆあんとこのあつた

はゆやゆゆあんとこのあつた

はゆやゆゆあんとこのあつた

はゆやゆゆあんとこのあつた

一葉もつた柳のよは柳風と
ふゆあつたあるを花と
とらにけつたあつた

羽織もつた柳もつた柳川なり

風もつた柳もつた柳川なり

夜もつた柳もつた柳川なり

おひつた柳もつた柳川なり

はゆやゆゆあんとこのあつた

はゆやゆゆあんとこのあつた

水鳥の舟に草花をたふす女あり
かき入る火を燈青や小石の

春風うきよき梅をよめる

浪をよめるいささしとれ都なる
子梅や山玉の里乃ききる夜
宗任子比絶るをよめる月

いづれをよめるいささし

相違ふは所をよめるいささし

いささし甘るる梅をよめる

小春風をよめるいささし
れの花をよめるいささし
かき入る火をよめるいささし
きんりのつれをよめるいささし

老女の火をよめるいささし

いささし火をよめるいささし
いささし火をよめるいささし
いささし火をよめるいささし
いささし火をよめるいささし

視る事てふ事よき大徳を
 岩田はより大徳の完なり立証なり
 證命なき松尾はらく松尾はら
 ころにあのころみぬの陽の光
 ありはたはれはらるるや其
 毒なきまははらる

巨峰もてあまの山を形はら
 腰みけの書ははらるる巨峰を
 山ははらるるのこころはら

鑑の音なりとておはらるる
 大深山の管心なきぬはらるる

春友樓會

正しくひのちをたみ居る松尾は
 大とてら番集りたりするの
 川もや松尾の体なるこは
 子とて居るヲ教ふたのて松尾は
 草植て松の心はらるる
 松尾の松ははらるる松尾は

息休する在の女とて名を枯木

金梅寺を遊る處

我を死んで得く道は枯木元
るの處に、をらるる枯木元
蕭條として石よ日乃入枯木元
大身病の復常とての。

夜醒や病よの起つ病に
待く人乃是ま日なをの病葉に
菊の黄く雨疎くくを病葉に

たすのあふあふはははを病
行を待てて畑をのける病葉に
碧葉を拾ひて残る梅のまら
おーらるる病の病伊の書る
菊の黄くはははを病葉に
おのそのうちぬたるとあつめて
さふを我まといふる病葉に
り、草柿のまを病葉に
西吹せをうたはる病葉に

鮫汁の宿毒くく蛇一々
 やけの我流すたる病えは
 秋月の号くハ志りやくとけ
 音ふせきとゆく流も鮫一
 河豚の面世上のくで白眼哉
 鳧らうて鰻^ニを中世の友とむ
 袴^ニそて鮫^ニを^ニ居る所人と
 雀^ニ英^ニハ向^ニ家^ニあて信^ニう^ニ
 おのこし^ニるし^ニを^ニ子^ニと^ニま^ニいて^ニい^ニく

鮫も蛇毒佛にたふすので
 流^ニれ^ニを^ニあ^ニら^ニう^ニた^ニれ^ニハ
 ら^ニと^ニく^ニの^ニ流^ニ出^ニる^ニや^ニ取^ニる^ニ露^ニ
 大^ニ魚^ニら^ニう^ニ兵^ニ庫^ニの^ニ強^ニ弱^ニを^ニ
 几^ニ董^ニく^ニも^ニた^ニ流^ニは^ニ人^ニと
 と^ニあ^ニを^ニと^ニは^ニり^ニさ^ニる^ニに
 風^ニく^ニ鯉^ニ吹^ニる^ニや^ニ鉤^ニの^ニ魚^ニ
 こ^ニら^ニや^ニひ^ニと^ニは^ニら^ニう^ニく^ニ内^ニる^ニ
 お^ニら^ニも^ニ富^ニの^ニた^ニ目^ニと^ニめ^ニる

こり物候う世の中は立止る
風や木の吹きてき花の風
木枯や清う山石を吹めてる
ふらふら岩を裂り水の音

晋子とすと同

播盆の形とこりやきする衆
孝養や百やして生る白くさの
初雪や清れをそ又その霧
初雪乃を雁を叩て竹の月

題七歩詩

雪おちや雪を扇う華金の下
雪の音野にやうて飛ぶがうを
うつみやや飛らぬ家も雪の中
いさ雪見 カクキツクリ 小谷す と兼とんま
湯をけて淀の山鶴と雪の人
雪白ーかぎの女くさてして
雪おちやうれきまなれよめ
酒をばし酒う飲ん雪と徳

影をちや室の掩ふの影をけ
入たのよゝもつらぬ 柳をけ
影をちや影を掩ふはるく
宿をよめ 影の雪の影を

几筆と信筆より海さ

雲を百里舟中く我月を欲す

影く鏡基余のまを影や坊

守りて影をそ 知具を中山西遊く

影をそ 在再とて 晦朔の

代傳をそ 中を 影のそ

たるをそ 影をそ 影の

影をそ 影をそ 影の

陶弘景詩

山中の相 雪中乃ちをそ

影をそ 影をそ 影の

川をそ 影をそ 影の

影をそ 影をそ 影の

影をそ 影をそ 影の

けわの如きはなまきり
おをよふ入候一世もあこし娘子の
我ひゆくま世のまはまひまはる
さあまといひゆくたかく雨あひ
ひゆまきしきんらものゆげはあ

引立

白えさやねらさたあやと妹う許
うらえをや取らまきせし殿けら
かのまらるるあつははけたる

吾より信く直とてあま

懶く候ふ

白えさやまきしを家あふ
新たあつ地足をと候ふれ至る
書記典主の園とせよ老心外
水仙やまきし都のまきしこ
水仙や美人のまきし
あ仙や彫のまきし花はめ
れさしやまきしあま富

○
露もあはて露をりかゝるる
葱常て枯木の岸を海つら
しむれ少く花風古葉も
見ゆかぬる風をくさるる
血を踏 露は音乃 露は

郊外

静ぬるうれ木ららやれの月
おの月ハ夢を感せし

同二句

二村う 露を一葉のさくさ
木のむらり人の膝にぬす
露も美をあらわす
お入て香るおらやれ
ゆりまきて我れあはれ
一瓢のしんて高のやれ
おれしのかまのしんた
ゆりまきて我れあはれ

わさ春太雪ふかきゆり陣叩
西倉いもくあつまをさくら枝

此方積るといふは

此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは
此方積るといふは

白貝居ハ詠

愚々耐よと意を晴きて雪の竹
よこなるは波よして賤しを苦なる
我の此れは葉おろるるをを何ド
紙よを居お目ふくありれこ
氷る紙乃ゆうくくあつまのな
此れこのひきこ火桶よ並い居る
我を居お隣をさおの福を唱む
崖巖よ幸乃水也此は指

玉手より矢程のふりありは
玉まぬ浮舟の福をみたるは
古也く草履はてみたるは
山水の減るを減りて氷のな

徹素堂

就鮭や刺さる斧うつしあり
うら鮭は腰する市北のふり
うらさげや帯刀あり乃高所
禮法師 卓鮭 鮭の味を彫

鐵骨より梅の枝を

字をる画はし
や梅や火の燃る鐵より
き梅をよおさるや老う時

感偶

き月や門たのきき寺の天高
き月や鎌山石乃ありは
寒月や枯木の伸乃竹之竿
をこや丸徒の群議の道で好

○ さきみやちきく湯へ誰り子と
伊豆の近江いづたさ念佛
を修離の上の所ま来りり
さきみやちきく湯へ誰り子と

几董判白合

解を責なり、刀を盡くり
去り、と立海原、くり茶喰
茶喰隣の真主 著おみ未

さきみやちきく湯へ誰り子と
妻あや子れ島島もたは茶喰
客僧の住高入やくさく湯
春沙中うおしし

君運もこよいかゆをせと一七心
にひさ木のまひんたの難魚お小
おまのちか枝も枝ぬらとち推る
くさむらや師走の枝をら
湯経くさくやうたをたる替

ういづら 積る雪のふ所を
ゆく逢ふ 地田を廻るや 金む脚
とも ぬれいたるく ぬれたり

北首

石公へ 五百目より せられ
とも や 泉睡の 夕戸 簾乃 捧

さきとて けらと ちかき ちかき

芭蕉去て その ちかき ちかき

益村白集下巻終

萩羊 益村 常々 へらく 益村 白集 かくて
あり ぢん じき 名 たる 人 乃 其 白 集
出 日 来 の 色 異 々 を 滅 する もの 多し
況 汎 乃 字 を や と 志 する だ 門 紙 一 人 の
書 材 あり て あ ら うち 白 集 を 梓 子 ちり
え め じ ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
益 滅 後 よ いた ら して 二 三 子 ち ち ち ち ち ち ち
あ つ ち て 是 ち ち 前後 乃 二 三 子 ち ち ち ち ち ち ち
小 祥 大 祥 二 三 子 の 追 福 の ため ち ち ち ち ち ち ち

其志又浩々乎と云ふ下りたる白集を
 予は引く事とあるがこゝに存乃本意
 よりあらす全く是をよみてけねを識す
 へうすと云ふも田福志と云

天の四甲辰之冬十二月

大坂書林庶寫猷可堂藏版目錄

増屋忠玄清

七女子詩集 小本 一冊

發蒙書東式 三冊

眞景 伊勢參宮名所志 六冊

同 掌故 三冊

傷寒五法 五冊

繪本廿四孝 一冊

同 註解 二冊

茶道七事式 二冊

盆石圖式 三冊

同 國字解 二冊

町見辨疑 西川氏著 五冊

茶功適 抄一箋

同 七律解 二冊

三界一心記 抄一冊

農家心得草 抄一冊

詩法授幼抄 小本 一冊

將棊指覽抄 小本 二冊

狂歌芳分船 園果子撰 一冊

絶句律平仄位置圖ナラニ詩作ラコ
 ニナルキナラニ熟語ヲアツム

斧介集 詳聯ノ書全 一冊
 平仄附

神代古訓抄 一冊

詩對類語 同 全 一冊

詩家法語 熟事全 一冊
 仄附

同 全 一冊

同 全 一冊

大坂書林

和歌相火桶 室書 二冊

新元法 蘇村著 月漢西 一冊

在在の教 蘇村著 二冊

同拾巻 二冊

其角難儀 二冊

同又元集 四冊

獲元元集 四冊

俳諧小づち 小本 一冊

同来かり 千代全 一冊

同四季歌 二柳全 一冊

同拾巻 同人著 全 一冊

同小外 堀全 一冊

同極秘傳抄 全 一冊

蘇村發句集 夜半 二冊

二柳菴句集 蘇村著 二冊

西行集 二冊

俳諧分歌 六冊

教 全 一冊

さう大 全 一冊

毛吹 全 一冊

片 全 一冊

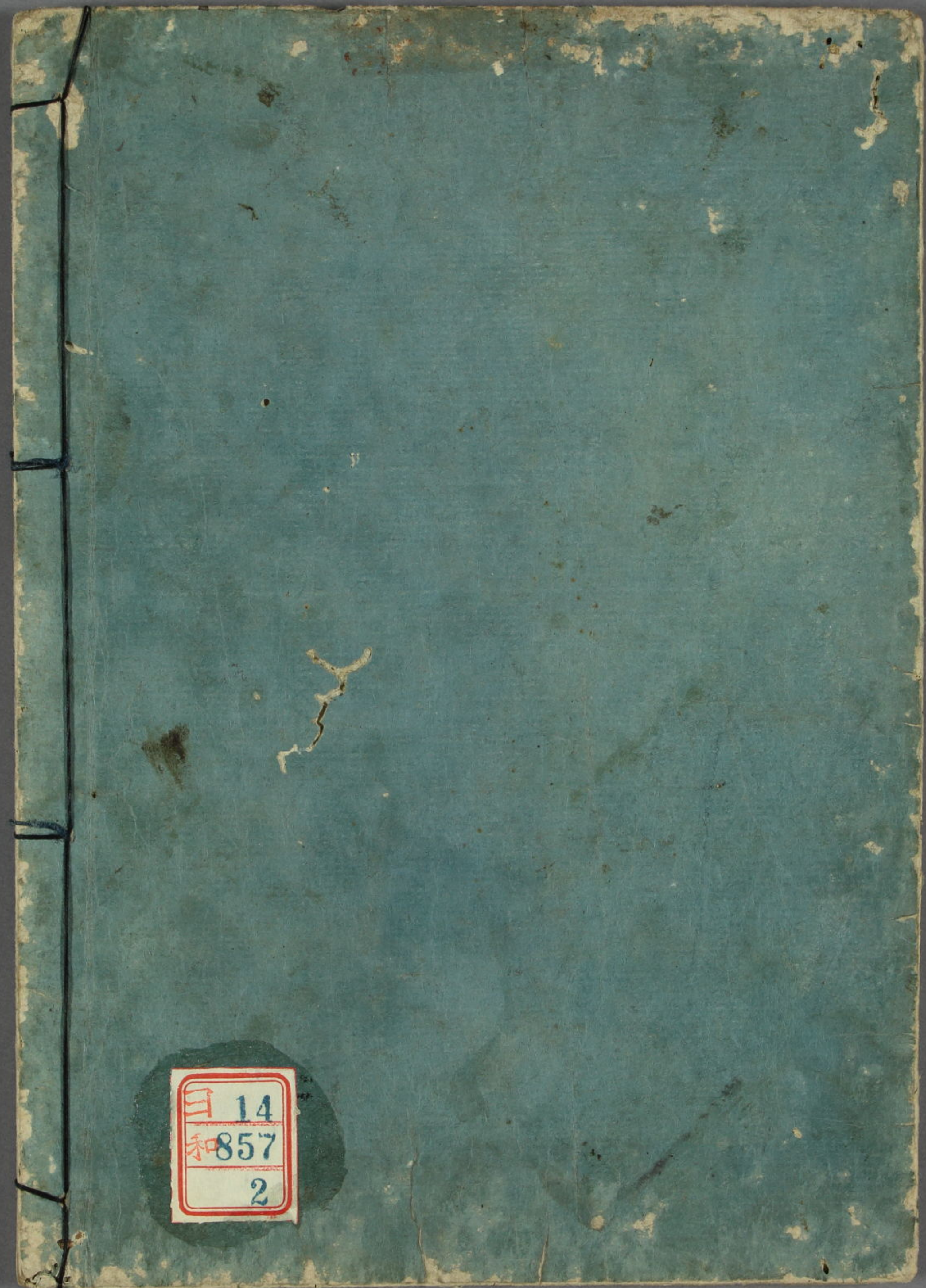
同二 全 一冊

増補 都年中參詣記

両面摺

打本 一冊

此書は四月九日十一月晦日と年中乃松軒社神楽
 徳寺の法會或は徳寺方因張徳講十夜式報恩講大講堂
 乃思を正月の末日満濟の定日其外社佛圖四時の
 梅と初元法源著釋尊見よまま遊の後地名所回廊すて山城
 園中此事九と由を且侍方連雜推客の便人奉と六
 書集附録より京より徳方への行程天覧此晴雨成掌中
 と此減三年三百六十日乃再集と一紙とやとりしめ
 重空の事
 板元書林 京新町通一條下西側 迫江屋新兵衛



目 14
和 857
2